

## 狩猟採集文化のデパート ——インド、アンダマン島の人類学博物館

いまだ外部からの調査が許されないアンダマン諸島。狩猟・採集・漁撈という、島嶼部ではとくに消えてしまいがちの営みが政府によって保護され、残されている。この地域にある人類学博物館は、そのような人びとの現在のくらしが生きづく展示がなされていた。

### 国境に位置する南国の島々

南インドの中心都市チェンナイ(マドラス)の空港から約二時間。飛行機の窓からアンダマンの島々が見える。海岸線に沿って青色の海は美しく、北センチニーレス島は島内のほとんどがジャングルでおおわれている。聞くところによると、この森のなかでは、現在でも狩猟、採集、漁撈に従事する人びとが現代文明とはかけ離れて暮らしているというが、不明な点も多い。まもなく、アンダマン島の中心地ポートブレアに着く。

ここは、インド亜大陸のベンガルやパンジャブ地方などから多くの人びとが集まってきた街であり、国立の人類学博物館 (Anthropological museum) が中心部に位置する。ここでは、アンダマン諸島およびニコバル諸島における伝統文化がおもに紹介されている。まず、この街には一九五一年にふたつの諸島を対象にした人類学の研究センターが設立され、現地調査のかたわらに民族学的資料が集められた。そして、一九五六年には政府が四つの部族保護区 (tribal reserve) を設立する一方で、一九七五年に、これらの資料を保存・管理すると同時に一般に公開するために現在の博物館がつくられた。

### 表象される狩猟採集民

博物館のなかに入ると、わたしは、世界中の民族、とくにネグロイドとモンゴロイドの写真を散りばめた大きな地図に感心してしまった。カラハリ砂漠のクン・サン (ブッシュマン)、コンゴ盆地のアカ・ピグミー、ブラジルのカヤポ、ロシアのコリヤーク、そして日本人など、慣れ親しんだ写真が多い。このなかにアンダマン島のジャラワやニコバル農民が含まれているのだ。いきなり地域の個別の文化に入るのはなくて、大局をとらえるような工夫がなされている。

つぎに、先史や現存の狩猟採集民のコーナーがあるのが特徴である。人類は、アフリカを出て世界中に拡散をした。ここでは、マレー半島からアンダマン島に人類が移動してきたものとして、ルート図が示される。世界の狩猟採集民の一覧表があり、サケを銜(くは)でつくアイヌの写真が含まれているのも興味深い。地域に暮らすジャラワ、センチニーレス、オンゲ、ショーベンなどの民族を、地域比較の視点から位置付けている。

さらに、つぎのコーナーは、館内でもっとも重要な空間であり、ものを中心として現地の写真も併用して展示される。狩猟具や漁撈具などの資料が、それぞれの形を展示やデザインなどによって強調されて壁にはりつけられ、その上を厚いガラスがおおっている。一方で、センチニーレスの住まいは展示場の中心部に露出して置かれる簡易な建屋にすぎない。移動生活には便利なものであることがわかる。同時に、写真ではあるが、より大型のドーム状の家屋(ジャラワ)、高床の家屋(ニコバル農民)など、生活の様式に応じて家の形には多様性が認められる。また、カメやイノシシの頭骨が室内に飾られており、これらは海や森での精霊信仰を示すものになっている。

### 現在も生き続ける文化

これまでに、アンダマン諸島およびニコバル諸島での現地調査を許可された外国人を知らない。この地がタイとの国境に接するという要因もそのひとつのようだ。しかし、冒頭で述べたように、ここは島嶼部において狩猟や採集や漁撈が維持されてきた、世界でも最後の地域ではないかと思っている。イギリス植民地以前に知られていた二三の狩猟採集民のうち、現在では五つ(モンゴロイド四、ネグロイド二)が生存している。つまり、博物館で展示されているものが、現在でも使用されている可能性が高い。

その一方で、一九四二年から三年間、この地域を日本が統治していたという歴史を持っている。わたしたちが、この博物館に何かを貢献する方法が見つからないであろうか。そのひとつが災害に関する展示への協力である。二〇〇四年のスマトラ島沖地震による津波では、ニコバル農民は甚大なる被害を受け、狩猟採集民はそうではなかった。近い将来、東日本大震災の際の教訓をまじえて、お互いが話し合うことから始めてみたいと思っている。



池谷和信  
民博民族社会研究部



天井から吊られるカヌー



海や森での精霊信仰を示すイノシシの頭骨



センチニーレスの住まい



現地調査の際に集められた民族学的資料(パネル展示)



人類学博物館の展示場